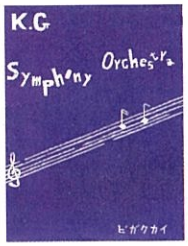
Non-regular concerts

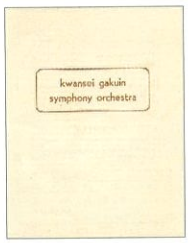
1951～2003

定期演奏会以外のコンサート

国内コンサート

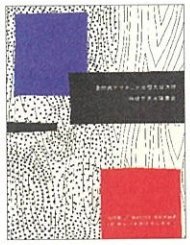


１９５３年６月６日
関西学院文学部美学会主催
於：神戸山手女学園講堂
シベリウス　交響詩「フィンランディア」
シューベルト　交響曲第８番「未完成」
バッハ　二つの提琴の為の二重奏曲
チャイコフスキー　バレー音楽「白鳥の湖」
指揮：尾河原明二郎
独奏：鞍谷敦子、戸田安紀子



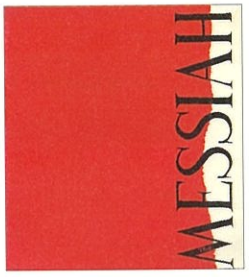
１９５３年６月７日
三田学園春季大演奏会
於：三田学園大講堂
グルック「アウリスのイフィゲネイア」序曲
シューベルト　交響曲第８番「未完成」
チャイコフスキー　バレエ音楽「白鳥の湖」
シベリウス　交響詩「フィンランディア」
指揮：尾河原明二郎

１９５３年９月２４日
ピアノ協奏曲の夕べ　於：大阪産経会館
シベリウス　交響詩「フィンランディア」
ウェーバー　小協奏曲
ラフマニノフ　協奏曲第２番
グリーグ　協奏曲
指揮：村田　忠・尾河原明二郎
独奏：阿曽沼豊子、吉川美代江、山田英子

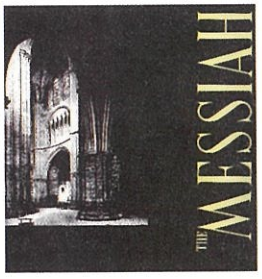


１９５５年１２月１０日
全関西アマチュア交響楽団連盟結成記念大演奏会
朝日新聞厚生文化事業団主催
於：宝塚大劇場
ガーシュイン　ラプソディー・イン・ブルー
指揮：牧野泰宣
ピアノ独奏：安見泰子

１９５６年６月２９日
第１回慶応･関学合同演奏会
於:大阪産経会館
ベートーヴェン「エグモント」序曲
ベートーヴェン 交響曲第５番「運命」
チャイコフスキー　バレエ音楽「白鳥の湖」より
シベリウス　交響詩「フィンランディア」
指揮：
西村　順吉（関西学院交響楽団）
中山富士雄（慶応ワグネルソサイエティ）

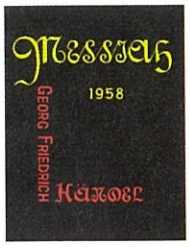


１９５６年１２月１２日
クリスマス特別演奏会“メサイア”
主催：関西学院グリークラブ
　　関西学院交響楽団
於:宝塚大劇場
指揮：ダビッド・ラーソン
独唱：野崎住子（Sp）
　　コネリア・ディック（Alt）
　　片岡通昭（Tn）
　　北村音壱（Bas）
合唱：神戸女学院音楽学部
　　関西学院グリークラブ



１９５７年１２月１６日
“メサイア”　大阪ＹＭＣＡ主催
於:大阪朝日会館
指揮：ダビッド・ラーソン
独唱：下里智惠子（Sp）
　　コネリア・ディック（Alt）
　　片岡通昭（Tn）
　　北村音壱（Bas）
合唱：神戸女学院音楽学部
　　関西学院グリークラブ

１９５７年１２月２０日
第２回慶応･関学合同演奏会
於：東京･日本青年館
ベートーヴェン　序曲「コリオラン」
ベートーヴェン 交響曲第５番「運命」
シューベルト　交響曲第８番「未完成」
ビゼー　組曲「アルルの女」第２組曲
指揮：
中山富士雄（慶応ワグネルソサイエティ）
須山　雄二（関西学院交響楽団）



１９５８年１２月６日
ＫＣＧＨクワイヤー10周年記念“メサイア”
関西学院高等部文化総部･宗教総部主催
於:神戸新聞会館
指揮：長井　斉
独唱：多賀谷起三子（Sp）
　　黒田ナミエ（Alt）
　　浦山弘三（Tn）
　　北村音壱（Bas）
合唱：
KCGH CHOIR（神戸女学院高等部コーラス部）
関西学院高等部グリークラブ

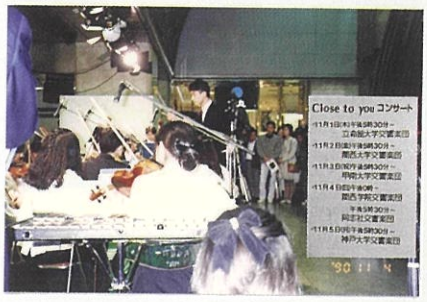
１９６１年７月１０日
交響曲の夕　於：甲南中学校体育館
ロッシーニ　歌劇「セビーリャの理髪師」序曲
ビゼー　「アルルの女」第２組曲
モーツアルト　ピアノ協奏曲第26番
シューベルト　交響曲第８番「未完成」
指揮：小川浩二郎　独奏：山崎寿子

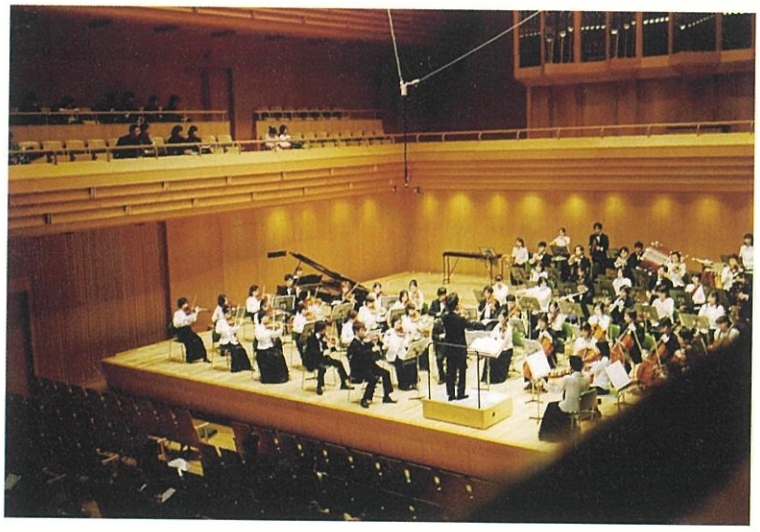
１９６６年５月１日
山田耕筰追悼演奏会
主催：関西学院学生会館文化活動委員会
共催：文化総部、総部放送局、新聞総部
後援：関西学院同窓会
於：フェスティバルホール

１９６６年６月11日
第３回慶応・関学合同演奏会　於：東京文京公会堂
モーツアルト　歌劇「魔笛」序曲（慶応）
モーツアルト　交響曲第39番（慶応）
ドヴォルジャーク　交響曲第９番「新世界より」（関学）
シベリウス　交響詩「フィンランディア」（合同演奏）
指揮：中山富士雄（慶応ワグネルソサイエティ）
　　井上　哲（関西学院交響楽団）

１９８１年７月１０日
ポートピア’81記念
関西学生オーケストラフェスティバル
於：神戸国際会議場・メインホール
ベートーヴェン　交響曲第７番
ヤーニシュ・メディシン　アリア
指揮：畑　道也

1990年11月４日
JR大阪駅中央コンコース・ウメダサンアレイにて　駅コン
ワルツィング・キャット
シンコペイテッドクロック
カヴァレリア・ルスティカーナより間奏曲など演奏





グランプリ受賞
２０００年１２月２３日
全日本学生オーケストラ大会
於：東京オペラシティ・コンサートホール
ラフマニノフ　交響曲第３番１楽章

私が学生指揮者を努めていた2000年12月23日，関西学院交響楽団は全日本学生オーケストラ大会に出場し、参加6回目にして初の大賞受賞を果たした。演奏曲目はラフマニノフの交響曲第3番より1楽章、会場となったのは東京オペラシティ大ホールである。大会側からの要請で午前中には会場入りする必要があったので、早朝6時頃には新大阪駅に集合して新幹線を待った。車内と屋外との気温差は激しく、また長距離の移動はそれだけで体力を消耗する。実際の演奏以上に、団全体のモチベーションの維持が重要課題だったのを覚えている。

細かな表現に関しては団員に任せ、リハーサル室では全体バランスの最終調整のみに徹した。司会から紹介を受けて団の入場、そして演奏の開始。予め知識として仕入れてはいたが、予想以上にホールの残響が激しく、開演早々戸惑ったのを覚えている。おそらく団員同士はほとんど互いを聴き取れない状況だったろう。残響の多いホールではセクション単位でリズム崩壊が起きる危険性が高い。極力明確な指示を心掛け続けたが、曲の複雑さもあり、やはり途中で何ヶ所かの崩壊が生じてしまった。しかし本番につき物のそのような局所的ミスはさておき，それが緊張による音の硬化に繋がらなかったのは幸いだった。関西人特有の肝の太さの賜物だろうか、ソロヴァイオリン、木管共に伸びやかに歌っており、金管も節度ある音量と歯切れの良さを保っていたと思う。汗だくになって指揮を終えたときには、満足して団員に目配せを送ることができた。

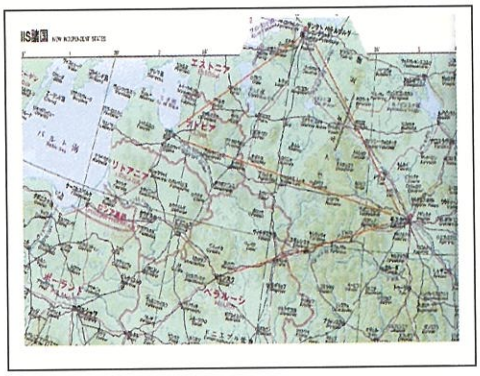
参加団体には、前大会大賞受賞校を含め強豪が揃っていた。表彰式で奨励賞、講評委員会賞と受賞校が読み上げられていく中、だめだったかと内心うなだれていたのだが、最後に読み上げられた大賞受賞校の名は「関西学院」。今でも忘れられない一瞬である。なお、僭越ながら最後に、公式には発表されなかったが、この大会史上初となる特別賞が急遽制定され、指揮者である私個人が受賞したことを申し添えておく。

第95回、96回指揮者・平成13年大阪大学卒　井　手　口　彰　典

海外遠征

第１回ソビエト演奏旅行　1976 年 2 月 29 日～3 月 14 日
団長：小寺武四郎顧問教授
指揮：畑　道也助教授

モスクワ
ミンスク　於：白ロシア国立フィルハーモニー会館
リガ　於：ラトビア国立大学講堂
レニングラード　於：レニングラード音楽院
ブラームス　交響曲第 4 番
ロッシーニ　「セビーリャの理髪師」序曲
小山清茂「管弦楽のための信濃囃子」
（第 47 回演奏会プログラムに報告）

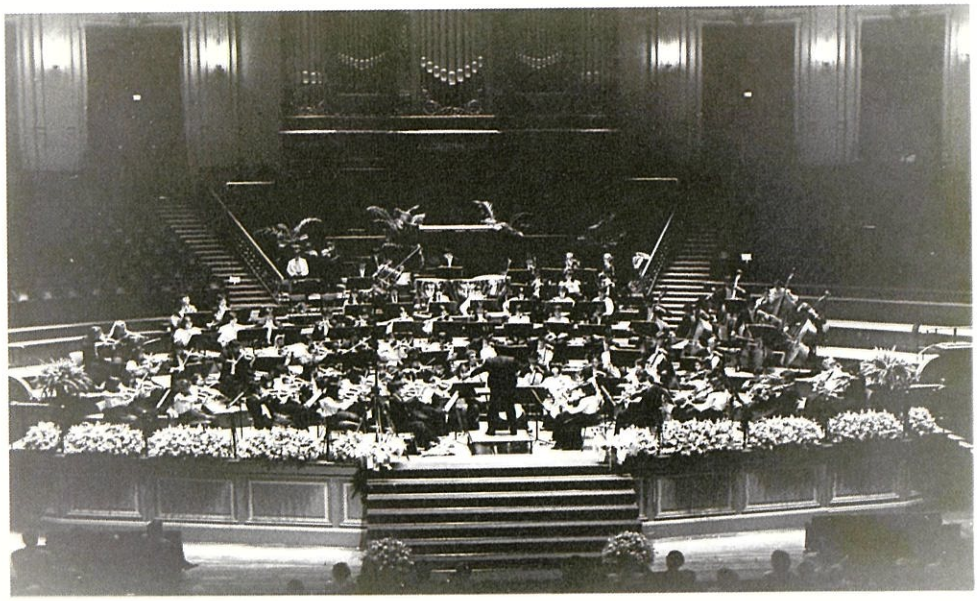


第２回ソビエト演奏旅行　1980 年 2 月 28 日～3 月 15 日
団長：田中國夫顧問教授
指揮：畑　道也助教授

ハバロフスク　於：ハバロフスク文化宮殿
リガ　於：リガ音楽院
レニングラード　於：レニングラード音楽院
モスクワ　於：グニエシン音楽院
ベートーヴェン　交響曲第 5 番「運命」
ルロイ・アンダーソン　ブルータンゴ、ワルツィングキャット、シンコペイテッド・クロック
高田三郎　山形民謡によるバラード
（ソ連演奏旅行報告書及び第 55 回演奏会プログラムにて報告）

第１回オランダ演奏旅行　1989 年 6 月 21 日～7 月 8 日
団長：田中國夫顧問教授
指揮：中田昌樹

Oldenzaal
Hengelo
Noordhorn
アムステルダム・コンセルトヘボウ
ベートーヴェン　交響曲第 3 番「英雄」
シベリウス　交響曲第 7 番他
（第 74 回演奏会プログラムに報告）



第２回オランダ演奏旅行　1992 年 8 月 23 日～9 月 7 日
団長：田中國夫顧問教授
指揮：中田昌樹

バトハンブルグ　於：クアハウス
デュッセルドルフ　於：ロバートシューマンザール
デンハーグ
フロリアード
アムステルダム　於：コンセルトヘボー
ベルゲン
（第 79 回、第 80 回演奏会プログラムに報告）

演奏曲目：
リスト　レ・プレリュード
グリーグ　ペールギュント第１組曲
ニールセン　交響曲第２番「四つの気質」
ベートーヴェン　ヴァイオリン協奏曲

—オランダ遠征の思い出—

音楽というすばらしい芸術に全く無縁でありました私が、関西学院大学という大学に奉職しまして、まずびっくりしたのが、神の前に美しい歌をささげる行事のあることでした。さらにびっくりしたことは、この大学に関西学院交響楽団があり、定期演奏会を行い、そのオーケストラが外国まで遠征されることでした。

オランダ・インターナショナルミュージックより招待を受け、ドイツ・オランダへの演奏旅行は1992年8月23日〜9月7日の16日間であり、2度目のヨーロッパ演奏旅行となりました。総勢103名、楽器類は32箱700kgの大荷物の大移動でした。こうした遠征の費用につきましては、後援会の皆々様や多くの法人協賛団体のご支援を頂きました。岩澤洋一演奏旅行マネージャー、帖地博幸部長、杉本賢学生指揮者、平田康子コンサートミストレスなどを中心とし、指揮者の中田昌樹氏にご指導を受けました。

オランダでの滞在は大半がホームステイで、ホストファミリーはハーグのジュニアオーケストラの家族で、手厚い歓迎を受けました。世界3大ホールのひとつと言われているアムステルダム・コンセルトヘボウでの演奏会は、翌日の新聞でも高く評価される質の高いものとなりました。

「この人達が本当に学生なのか、プロではないのか」との質問もでたりして、「この学生達は、それぞれに文学や、法学、経済学などを学んでる学生ですよ」との私の返事に驚くのでした。

外出が許された時、学生達と私はともかく子供達があそんでいるところにとんで行きました。そして、大きな声で一緒に歌をうたいました。それは日本の童謡でありました。

私達は、ひとり、ひとりの目をみながら
“夕やけ、こやけでひがくれて”
“山のお寺のかねがなる”
“おててつないで、みなかえろ”
私達といっしょに、懸命に歌おうとしている子供達の姿がありました。別れの日には、私達の乗ったバスを、子供達は手を振りながらいつまでも追いかけ名残を惜しんでくれたのでした。お互いの目には涙が溢れながら・・・・・・。

神戸市市民福祉大学学長
関西学院大学名誉教授
関西学院交響楽団名誉顧問　田　中　國　夫

’76　関西学院交響楽団ソビエト演奏旅行
1976年2月29日〜3月14日

—海外演奏旅行事始め—

第一回ソビエト演奏旅行の話は、まだ部員のほとんどが海外旅行は勿論、飛行機にすら乗ったことがない状況の中で持ち上がりました。

その時、日岡部長を先頭に部員全員が一つ一つの問題を解決して、ＯＢ会の御支援も頂き、やっと実現のめどがついたところで、部員の家族に対する説明会を行いました。そこで、「この旅行の総責任者は、誰か」という我々学生には手に負えない、計画の実現を左右する大問題が父兄から示されました。勿論、畑先生が指揮者として同行することは決まっていたのですが、総責任者としての重責を重ねて負っていただくことは、御本人が覚悟されていたものの、家族の方々には当時まだ若かった先生に全幅の信頼を預けることは難しいことだと思われました。

当時、社会主義国に学生のオーケストラが演奏旅行をすることは予想のつかない事で、不安を感じない親はいなかったでしょう。その心の底にある不安の高まりが、「総責任者」を問うことになって現れたのでしょう。重苦しい空気の中、黙って話を聞いていた顧問の小寺先生がすっと立ち上がり、「私です。私が責任者としてこの旅行に家内と同行いたします。」と言われました。　学院の重鎮である先生が、極寒のソビエトへ奥様と御一緒に学生に同行すると聞いた瞬間、その場に大きな安堵の空気が広がりました。説明会は大成功に終わり、関オケ史上初めての海外演奏旅行が決定しました。

当時の学生達は私も含めて、自分のことで精一杯な状態でした。旅行中もその後も、先生御夫妻には失礼が多々あったことを今更ながらに申し訳なく悔やんでおります。　「学生達の望むことなら･･･」と身を挺してそれを実現させる先生御夫妻のお姿に、2週間に及ぶ長い間、接することが出来た私達は本当に幸せでした。

学生時代だけでなく人生を通して最も貴重な時間であり、その事が大きな誇りとして私の胸に残っていることを、先生御夫妻に心から感謝して、今は御夫妻の御健康をお祈りするばかりです。

昭和53年(1978)理卒　木根渕　至

—ロシアがまだソビエトといわれていた頃—

一九八〇年の三月、総勢八十数名の関西学院オーケストラは二度目のソビエト演奏旅行のため新潟から空路ハバロフスクに旅立ちました。
顧問・田中國夫先生と常任指揮者の畑道也先生のご尽力で実現したすばらしい旅であり、卒業後二十年を経たいまでも、学生時代を回顧するとき真っ先に思い浮かぶ貴重な体験となっています。その実現にあたっては渉外マネージャーとして、学生ながらいろいろと苦労したのも事実ですが、人間はいやなことはすぐに忘れて楽しい思い出だけがのこるものです。

今でこそ、学生の海外旅行はめずらしくないご時世になりましたが、当時はまったくの綱渡り旅行であったことを思い出します。社会主義体制の旧ソ連入りは大きな困難をともなう旅でした。出発二ヶ月前にソ連のアフガン侵攻がはじまり、その結果、西側諸国はモスクワ・オリンピックをボイコットするにいたりました。今、世間を騒がせているアフガン問題はこのときを起点としています。あのとき、十年後のソビエト崩壊などだれが予想できたでしょう。チェルノビリ原発事故に先立つ六年前です。ソビエトは自信に満ちた超大国であり、モスクワ五輪で世界にその威容を誇示する準備を着々と整えていました。

わたしがはじめて見た外国の地は、この旅行の最初の訪問地ハバロフスクです。新潟から空路一時間半の距離に堂々たるソビエトの都市があることに驚かされました。フリーザーのように凍った地面を砂埃のように舞う粉雪の風景をいまでもはっきりと思い出します。ソビエト最新鋭イリューシン型航空機でのモスクワ到着は夕暮れ時でした。町に向かう車窓から数知れない民家の灯りが見えました。その一つひとつにわたしたちと同じように家庭を大切にするごく普通の人々が暮らしていると思うと緊張がとけるようでした。バルト三国のラトビアでは首都リガの音大生と交流し、今は世界遺産に登録された中世の町をぬけてカテドラルの音楽会に向かった思い出が懐かしく蘇ります。レニングラード（いまのサンクト・ペテルブルグ）でエリート音大生たちがアマチュア学生楽団を暖かく迎えてくれました。外見は立派に手入れされていても中はただの倉庫と荒れ果てるロシア正教会を覗き込んだのも昨日のことのようです。

あのとき共に旅をした一人ひとりはそれぞれの持ち場で頑張っているのでしょう。関学オケの思い出をと聴かれたら、今はロシアとなったソビエトの凍りついた大地が浮かぶのではないでしょうか。青春の一時を熱くすごした地として。

現在、私は学生に囲まれた日常を送っていますが、キャンパス内でヴァイオリンやチェロを抱えて行き来する学生をみるたびに自分の体験した関学オケのことをちょっぴり誇らしく振り返る今日この頃です。青春時代になにか燃えるものをもっていたことは本当に幸せでした。あのソビエト旅行は関学オケが与えてくれた一生のプレゼントであったと心から感謝せずにはおれません。

昭和56年(1981)文卒　川村信三